



巻頭言

再び、学会と工学教育について

規格調査会委員長 柳井 久義

我が国の高等教育機関、殊に大学に対する厳しい批判と反省が行われるようになってから既に久しい。最近になってようやく、これが我が民族の将来にとって由々しい問題点の一つであるとの認識から、政府、産業界をはじめ社会的にも関心が高まり、種々の対策が講じられるようになって来たことは、問題の根が深く一朝一夕に改まるとはいえないとしても、我々の是非取らねばならない方向への動きとして、誠に喜ばしいことと思う。しかし、最近の各方面の動きを見ていると、重要なポイントはその内容と質にあるにかかわらず、我が学界・教育界が明治以来たどって来た後進性の枠から脱却することが難しく、息の長い基本的な問題にはなかなか踏み込めないでいるのではなかろうか、という感がしないでもない。このようなことから、私も3年前に、この巻頭言で「学会と工学教育」と題して感想を述べて置いたのであるが、あえて再びこの問題を取り上げ書かせて頂くこととした。

学術研究のメッカとして、大学での研究活動の整備、活性化を計ることの重要性は論を待たないところであり、今日これに対する関心は大いに高まった。また、これに対する学会の重要性は従来からもよく認識されていて、学会はその責務を十二分に果たして来た。問題はむしろ、進学年齢人口の40%近くがいわゆる大学に進む大学教育の大衆化時代にあつて、工学教育の活性化、近代化を如何に計るかというところにあろう。殊に本学会の扱う電子・情報・通信の分野は、現代社会における重要な科学・工学・技術の分野として、これを支える多数の広い範囲にわたる後継技術者の養成が強く要望されている。

これに対して、この方面の科学・工学・技術が大きく発展し、抜本的に変革した今日、何が在学時代に学習して置くべき基礎的の学問で、何が訓練して置くべき基礎能力であり、何が習得して置くべき知識なのか、を産・学・官の経験豊かな会員を擁する本学会のような総合学会で、職業分野別に具体的に検討し、指針を出して行くべきではなかろうか。更に、その基礎的の学問に対しては、いたずらに高度化、専門・細分化することなく、基本的な考え方をだれでもが把握できるように学問体系を、学会が中心となって作り上げて行かなければならぬのではなかろうか。各大学が、それらの中から、それぞれの大学の教育目標に合せた取捨選択をし、多様な教育ができるようなものが欲しいと思う。

このようなことは、工業教育協会のようなところが行うのが本筋かもしれないが、内容を伴った問題は、やはり学会でないとできないであろう。